哲學研究　第七十四號　第七卷第五册

シェリングに於ける自由の哲學の發展（承前）

世良壽男

三　自我としての自由（先驗的自由の成立の問題）

一　シェリングの自然哲學は以上の如く主客合一としての眞の知識又は眞の實在を明らかにする爲めに先づ客觀的より出發しこの客觀的に徹しそれの發展史を辿ることによりて、如何にして客觀的は主觀的に自然は叡智に發展し來るかを考察し、かくしてカントによりて提出せられ、フィヒテに於て未解決のまゝに殘されたる自然の特殊付けの問題を解決し、自然と叡智、必然と自由との對立を克服して自然の理性化又は自由化を全うせんとするものであつた。然しながらこれが爲めにシェリングがかく第一として出發したる自然は決して單なる存在としての自然ではなくして、

存在構成の生ける力としての自然でなければならなかつた。自然は單に叙述せられ計量せられ因果的に說明せらるべき死せる機制ではなくして、それ自からの機能又は範疇に從ひて無限に自からを發展し實現するところの創造的生命でなければならなかつた。而して此くの如き自然に於てのみ自然はそれ自からの歷史を有ちそれの特殊付けの意義と根據とを有つと言はなければならぬ。然し今自然が此の如く單なる所產物でなくして原本的能產性であり、死せる機制でなくして無限の創造的本質であるといふことは如何にして可能であらうか。こは言ふまでもなく、かの思惟が同時に直觀であり直觀が同時に生產であるところの、換言すれば對象を思惟することがやがて同時に對象を創造することであるところの知的直觀によりてのみ可能であつた。然らば此の如き知的直觀は如何にして可能であらうか。かくて自然はそれが『それの主觀にかへりゆく能力』としての感覺性にまで發展し來りそれ自からの根據を反省し始めたる時に於て、從つて自然哲學がそれの根本豫想であり根本機關であるところの知的直觀の可能を問題とする場合に於て、自然はやがて叙智となり、哲學の對象は客觀的より主觀的へ、自然の自由化の問題より自我の自由の問題へ、自然哲學は先驗哲學へ移つて行かなければならぬ。

今先驗哲學は、かの自然哲學が客觀的をば主觀的に、自然をば叡智に、自然法則をば叡智の法則にvergeistigenする爲めに客觀的又は自然より出發したやうに、主觀的をば客觀的に、叡智をば自然に、叡智の法則をば自然法則にmaterialisirenする爲めに主觀的又は叡智より出發する、而てかの自然哲學が深く客觀的又は自然の根抵に突入してそこに自然そのものゝ機能又は範疇を把捉し、自然と共に生き自然と共に發展することによりて自然の自由化を全うすべきであつたやうに、先驗哲學に於ても、それが出發するところの主觀的又は叡智をばそれの根源の相、純粹の相に於て捉へ、そこに作用と對象、意味と事實との原本的結合の根據を見出し、而て如何にしてそれがそれ自からを直觀し反省し再現することによりて認識對象界を造りゆくか、而て更らにこの認識對象界の根據を反省し客觀化することによりて『第二の自然』としての道德對象界を發展し、かの『絕對自由の現象』としての先驗的自由を實現し來るか、而て最後に、如何にしてそはこの認識對象界と道德對象界とを更らにそれの根柢に於て反省し統一して、客觀的と主觀的、自然と叡智、必然と自由との絕對的同一の實現としての美的對象界を發展し來るか、換言すれば主觀的又は叡智そのものゝ內面的發展史、又は『自我の漸次的展相化』(eine beständige Potenzirung des Ich)を辿ることによりての

み一方『凡ての先驗的思惟の機關』としての知的直觀を權利付くると共に他方如何にして自我は自由の本質として可能なるかを基礎付けることが出來るのである。かくてかの自然哲學にて於『如何にして先天的自然は可能であるか』がそれの根本問題であつたやうに、『如何にして先天的自我は可能であるか』が先驗哲學の第一の課題でなければならぬ。

二　シェリングに從へば、今吾人にして或ることを知らんと欲するならば吾人は同時に吾人の知識が實在性を有することを欲する、從つてそれに於て凡てが依存し、それよりして凡ての成素及び形式が出發するところの實在性の究極點(letzter Punkt der Realität)が存在しなければならぬ。人間知識に於けるこの究極的のものはそれ故にそれの實在根據をば再び或る他のものゝ中に求めてはならぬ、こは吾人に對して凡ての認識の原理であつて再び他の原理によりて可認識的でないところのものでなければならぬ、卽ちそはそれの存在(Sein)によりてのみ可思惟的(denkbar)であり、それの思惟によりてのみ存在するところのもの、又は、それの肯定をばそれの思惟の中に含み、それの思惟自からによりて自己を生產するところの、換言すれば實在原理(Principium essendi)がやがて同時に認識原理(Principium cognoscendi)であるごときものでなけ

ればならぬ(Vom Ich als Prinzip der Philosophie, s. 162-3; System der transz. Idealismus, s. 368)然らば此くの如く存在と思惟、對象と作用とが原本的に同一であるやうな究極的原理は果して何處にこを求むできであらうか。かのフィヒテの知識學より出發しそれの先驗心理的方法を辿れるシェリングがこれをば同じく吾人の自覺の本質中に見出したのは當然であると言はなければならぬ。今吾人がそれ以上に逸出することを得ないところの、從つて凡ての知識が依存し而かもそれの彼岸に何等の知識もないところの、又は唯だに働らくのみならずこの働らきを直觀し、唯だに實在的であるのみならず又觀念的であるやうな知識の究極原理は吾人自からについての知識卽ち自覺の事實を外にしてはこれを求むることを得ない。假令かの自然哲學に於けるやうに客觀的が第一のものとして立せられるとするも吾人は決してこの自覺以上に逸出することは出來ぬ、卽ち自然哲學に於ても存在は決して原本的でなくして原本的なるものは却つて無限の發展を自己の中に藏するところの創造的自然であつた。卽ち『自然の死せる且つ無意識的なる所產物は、自己自からを反省せんとする自然の失敗せる試みに過ぎない、而かもこの所謂死せる自然は一般には未熟の叡智(unreife Intelligenz)である、それ故にそれの現象中にはなほ無意識的ではあるが己に叡

智的性格(intelligenter Charakter)が現はれてゐる。而してそれ自から全く對象となるといふ最高目的をば自然は人間に外ならないところの、又は一層一般的には吾人が理性と稱するところの最高且つ最後の反省によりて始めて到達する、而してこの理性によりて自然は始めて完全に自己自からに歸入するのである』(Sys. d. tr. Ideal., S. 341)。かくて自然は『それの最高の展相に於ては自覺以外の何物でもない』(Ib., s.357)。加之一般にそれに對して存在(Sein)が原本的のものとして立せられるところの(Dogmatismus)獨斷論は唯だ無限的回歸(unendliche Regressus)といふことによりてのみ說明せられることが出來る、何となればそれに於てかれの說明が進むところの原因結果の系列は、唯だ、自己自から同時に原因にして且つ結果であるところの或物によりてのみ完結せられることが出來るから。而かもこのそれ自から同時に原因にして且つ結果であるところの究極原理は、もはや決してかの因果の範疇によりて制約せらるゝ存在的實在ではなくして却つて無限の因果關係をそれの中に含みそれの中より生產して存在界を成立せしむるところの觀念的又は當爲的實在でなければならぬ、從つて獨斷論はそれの完成に於て再び先驗哲學の原理に歸り來ると言はなければならぬ。それ故に『徹底的獨斷論は、かのスピノザ主義(Spinozismus)に於てのみ存

在するが、然しこのスピノザ主義は、實在的體系として、再びそれの究極歸結が先驗哲學の原理であるところの自然科學としてのみ維持することが出來るのである』(Ib., s. 356)。之を要するにかの客觀的より出發するところの自然哲學に於ても、又一般に存在原理を根據とする獨斷論に於てもこの客觀的又は存在原理はそれの究極に於ては自覺の原理を豫想することによつてのみ成立し得るのである。かくて『自覺は、吾人の知識の無限に擴げらるゝところの地平線であり、而して凡ての方向に於て最高のものとして殘る』(Ib., s. 357)と言はなければならぬ。然らばかくの如き自覺の本質は果して如何なるものであらうか。シェリングによれば自覺とは言ふまでもなく自己が自己自からを知るといふことである、卽ち自己自からについての知識(Wissen von sich selbst)である、自我が自我自からを反省し對象とするといふことである。然しこの自我が自我自からを知るといふこと、又は自我が自己自からを反省し對象とするといふことは、かのフィヒテが力說したやうに、決して單に自我が自からを意識し表象するといふことではなくして、こは自我が自我自からに働らくことによりて一層深く高き自己の根柢に歸り行くことである、又は自我が自己自からの中に自己自からを寫すことによりて無限に自我の本質を實現しゆくことである。それ故に自覺の唯一內容で

あるところの『自我は自我である』(Ich bin Ich)は、フィヒテも言ふややうに、決してかの『AはAである』(A ist A)の如き同一命題ではない。『AはAである』は單に『AとAとの間の同一性の形式』であつてAが一般に實在性を有つや否やといふことはこれに於て保證せられてゐない、卽ちこは『若しAにして存在するならばそはそれ自からに等しい』(Sys. d. tr Ideal. s.360)といふことを表はせるに過ぎない。それ故にAを定立しそれに實在性を與ふるものはAではない、Aの概念はそれ自からの中にAの存在を含まない。然らばこのAに對してそれの實在性を立するものは何であるか。今『Aはそれが吾人の中に立せられ吾人によりて表象せらるゝ限りに於てのみ考察せられる』、而てAがそれ自からに等しいのは全く『余がAを思惟する間余はA以外の何物をも思惟しない』からである(Id., s. 362)、又はAを思惟する自我がそれ自からに等しいからである、卽ち『AはAである』はどこまでも自己同一的なる余の思惟卽ち『自我は自我である』てふ自覺の根據の上にのみ立成すると言はなければならぬ。然るに今この『自我は自我である』は決してかの同一命題の場合の如く『若し自我にして存在するならば自我は存在する』(Wenn Ich bin, so bin Ich)といふことではない。何となれば『若し自我にして存在するならば』といふ制約は、それの中に已に被制約と

しての『自我は存在する』を豫想してゐる、卽ち余は余をば已に存在するものとして思惟することなしには余の存在の制約を思惟することは出來ぬ。それ故にこの命題に於て制約は被制約者を制約せずして却つて被制約者が制約をば制約する。かくてこの命題は被制約的命題としての自からを止揚して無制約命題卽ち『自我は存在するが故に存在する』(Ich bin, weil Ich bin) 又は『自我は存在する』(Ich bin) とならなければならぬ(Vom Ich als Prinzip der Philosophie, s. 167)。かくて自覺に於ては自我を自我に等しとして立するところのものはどこまでも自我自からである、卽ち自覺は『自己自から對象となり、自己自からと同一なる思惟の行爲』である(Sys.d. tr. Ideal, s. 373) 又は『自覺はよつて以て思惟するものが直接的に對象となるところの作用であり、而してこの作用のみが自覺である』(Ib., s. 365)、而してこゝに自覺としての自我が、同時に認識原理にして且つ存在原理である根據があり、而して又こゝに『自我は自我である』が決して單なる同一命題でなくして、同一的にして同時に綜合的なる先天命題であり從つてこはかの『AはAである』てふ自同律によりて制約せられずして却つて『自我は自我である』が自同律を基礎付けるといふ根據が存するのである(Ib., s. 372-3)。かくて自覺としての自我は自己の思惟と自己自からとが原本的に同

一であるところの純粹作用(reiner Akt)であり純粹行爲(reines Tun)である、從つてこは何等のDingでもSacheでもなくして却つて無限に進み行く非對象的(das ins Unendliche fort Nichtobjektive)である。それ故にこの自覺としての自我にして何等かの意味に於て知識の對象として可能でなければならぬならば、換言すれば作用と對象との絕對的同一としての純粹行爲たるこの自覺がどこまでも一種の知識として可能でなければならぬならば、こは一般の知識とは全く異れる知識であると言はなければならぬ、卽ちそは第一に絕對自由の知識(absolut=freies Wissen)でなければならぬ、卽ちそれにまで何等の證明も推論も、一般に何等の概念の仲介をも有たないところの知識從つて直觀でなければならぬ、而かも第二にこの直觀はそれの對象がそれ自からより獨立的でなく、從つて同時にそれの對象の生產作用であり、しかもこれに於て生產するものと生產せられしものとが同一的である如き直觀、換言すれば、直觀作用が直觀せられしものより異るところの感性的直觀ではなくして『對象の生產作用と直觀作用とが絕對的に同一であるところの』直觀卽ち知的直觀(intellektuelle Anschauung)であると言はなければならぬ(Ib., s. 368-9)。かくて自我が自我を知るといふ自覺の本質はかの作用と對象との對立によつて成立する所の理解ではなくして、どこ

までも自我が自我に働らくことによつて自我自からを生産するところの、換言すれば自我の作用と對象としての自我とが全く同一であるところの絶對自由の自己直觀、即ち知的直觀である、かの『自我は自我である』は唯だそれがこの自己直觀又は知的直觀であるかぎりに於てのみ知識として可能であると言はなければならぬ。之を要するに自覺としての自我は、絶對自由なる純粹行爲としての知的直觀であつてこは何等時間に於て理解せられるやうな事物でも經驗的活動でもなく却つて凡ての事物凡ての活動に存在を與ふるもの、何等自からが荷はるべき他の存在を要せずしてどこまでも自己自からを荷ひ自己自からを支持する所の無限に進みゆくところの非對象的なる純粹活動である、從つてこは、決して論證せられ得ず唯だ要求せられ得るに過ぎない限りに於て、實踐的であり而かも純粹理論的構成を要求するかぎりに於て理論的なる要請(Postulat)でなければならぬ(Ib., s. 376)。それ故にこの自覺の內容としての『自我は自我である』は單なる理論的原理ではなくして同時に理論的且つ實踐的なる綜合原理であつて永久にそれの實現を要求し、主觀的には無限的生產作用として、客觀的には永久的成生として現はれ來る所の永久的課題である。然らば此の如き同時に理論的且つ實踐的なる要請としての、永久的課題としての自覺の

原理よりして如何にしてそれ自からの對象界は成立し發展し來るであらうか。

三　シェリング以爲らく、今自我の思惟がやがて自我そのものであり、作用が同時に對象に外ならないやうな絶對自由なる『無限に進みゆく純粹生産作用』であり從つて『直定的非對象的』であるところの自我は、前述の如く、唯だそれが自己直觀又は知的直觀である限りに於てのみ始めてそれ自から對象となることが出來る、而かもこの場合自我は決して外物に對して對象となるのではなくして自我自からに對して對象となる、卽ち自己對象といふことは自己直觀又は知的直觀としての自我の原本的制約でなければならぬ。然しながら『自我はかくそれ自からに對して成立する爲めには、卽ちそれが唯だに生産するものであるのみならず生産せられしものである爲めには自己の生産作用に對して限界(Grenze)を立しなければならぬ』(Sys. d. tr. Ideal, s. 380)。然るにこの自我の自己限定作用はやがて自我自からに於ける對立作用によりてのみ可能である、卽ち『自我は自から或物を對立するなとしには自己の生産作用を限定することは出來ぬ』換言すれば『自我はそれが生産作用として自己を限定する間にそは自己自から或物となる、卽ちそは自己自からを立する』のであるが而かも『定立(Setzen)の概念中には必然的に對立(Entgegensetzen)の概念が考へ

られる、從つて自己定立の行爲の中には、自我に對立する或物の定立の行爲が考へられる、それ故に自己定立の行爲は同時に同一的で且つ綜合的である』(Ib., s.381)。然し今かの自我の原本的無限的なる純粹活動は如何にしてこれに對立する有限的なる或物即ち非我として現はれ得るであらうか。シェリングによれば元來『自我は全く自からの中に閉込められたる世界(eine ganz in sich beschlossene Welt)である、又は自からより逸出することを得ず而かも自からの中に何物も外方より入り來るを得ないところのモナード(Monade)である。從つて自我は、若し自己定立の原本的行爲によりて同時に或る對立者が立せられないならば決して對立者(即ち客觀的)はそれの中に現はれて來ないであらう』(Ib., s. 381)。それ故に『かの對立者(又は非我)は再びよつて以て自我が自己自からに對して有限的となるところの行爲の說明根據であることを得ない』ゆへに、自我の原本的無限的活動が自己自からを限定すること、換言すればそれが有限的活動即ち非我として現はれ來るといふことは『自我は自我として、それが限定せられる限りに於てのみ非限定的であり而いて逆にそれが非限定的である限りに於てのみ限定的であることが出來る』(Das Ich als Ich unbegrenzt sein kann, nur insofern es begrenzt ist, und ungekehrt, es als Ich begrenzt, nur insofern es unbegrenzt ist.) (Ib.,

s. 382）といふことによりてのみ理解せられ得なければならぬ。然し此くの如く自我の非限定性が同時にそれの限定性の制約であり、それの限定性がやがてそれの非限定性の制約であるといふことは如何にして可能であらうか。シェリングによれば先づ『自我は自己自からに對してのみそれがあるところの凡てゞある。自我が無限的であるといふことは、自我が自己自からに對して無限的であるといふことである、而して自我が自己自からに對して無限的であるといふことはそれがかれの自己直觀に對して無限的であるといふことである』而かもこれと同時に『自我はそれが自からを直觀する間に有限的となる』(Ib., s. 383)。然らばこの自己直觀に於て自我が同時に無限的にして且つ有限的であるといふことは果して如何なる意味に於て理解せらるべきであらうか。こはやがて『自我が有限性に於てそれ自から無限的となる』といふこと、換言すれば『自我が無限的生成 (unendliches Werden) に於て自からを直觀する』(Ib., s. 383) といふことを外にしてはこを理解することは出來ぬ。今『生成は限定の制約の下を除いては考へることを得ない』從つて『自我にして生成である爲めには自我は制限せられねばならぬ。然るに自我にして無限的生成である爲めには制限は止揚せられねばならぬ。卽ち若し生產活動にしてそれの所產物(それの制

限)を越えて hinaus streben しないならば決して生産的でなく從つて決して生成でないであらう。然るに若し生産にして或る特定の地點に於て完成するならば、從つて制限が止揚せらるゝならばかの生産活動は無限的でないであらう。それ故に制限は止揚せらるべきであり而かも同時に止揚せらるべきでない』(Ib., s. 383)。而して此の矛盾は唯だ制限の無限的擴張(unendliche Erweiterung der Schranke)てふ媒概念によりてのみ解決せられることが出來る、卽ち制限は凡て特定の地點に於て止揚せられるが然しそは絕對的に止揚せられるのでなくして却つて唯だ無限に延期せられるといふことでなければならぬ(Ib., s. 384)。かくてこの無限に擴張せられたる限定性は、それの下にのみ自我が自我として無限的たり得るところの制約である、從つて『かの無限的なるものゝ限定性は、それの自我性(Ichheit)によりて、卽ちそれが唯だに無限者であるのみならず又同時に自我であること、換言すれば、それが自己自からに對する無限者(das Unendliche für sich selbst)であるといふことによりて立せられる』(Ib., s. 483)。而してこゝにかの自我はそれが限定せらるゝ限りに於てのみ非限定的であるといふことの意味が存するのである。

以上の如く吾人は自我の限定性をばそれの非限定性の制約として演繹すること

が出來るのであるが而かも此の場合制限が無限に擴張せられるといふことによりてのみそは非限定性の制約となり得たのである。然るに今『自我はこの制限に對して働らくとなしには制限を擴張することは出來ぬ、而して制限がこの行爲より獨立して存在することなしにはこの制限に對して働らくことは出來ぬ。それ故に制限は、それに對する自我の戰ひによりてのみ實在的となる。即ち若し自我にして制限に對してそれの活動を向けないならばその制限は自我に對して何等の制限でないであらう、即ちそは一般に存在しないであらう』(Ib., s.384-5)。然るに制限に對して自からを向くるところの活動は、無限に進みゆくところの自我の原本的活動に外ならない、而かもこの原本的無限的活動は、如何にして制限が reell となるかを説明するが然し如何にしてそれが又 ideell となるかを説明しない、即ちそは一般に自我の被限定を説明するが然しこの被限定についての自我の知識又は自己自からに對する自我の被限定を説明しない(Ib., s. 385)。然るに今自我に於て制限は同時に實在的にして且つ觀念的でなければならぬ。即ちそは實在的又は自我より獨立的でなければならぬ、これ若し然らざれば自我は現實的に限定せられぬから、而かもそは觀念的又は自我に依屬的でなければならぬ、これ若し然らざれば自我は自から自己を立しな

いから。而してかくの如く自我に於て制限が實在的であると同時に觀念的であるといふことは全く自覺そのものゝ本性に基づく、卽ち自覺に於ては自我が自己自からに對して限定せられるといふが、然し自我が限定せられる爲めには、制限は限定せられる活動より獨立的でなければならぬ、而かも自己が自己自からに對して限定せらるゝ爲には制限は自我に依屬的でなければならぬ、而してこの矛盾は唯だ自我そのものに於ける原本的對立、卽ち『自我は、制限がそれより獨立的であるところの限定せらるゝ活動と、非限定的であるところの限定する活動とがそれに於て存在するところの行爲である』(Ib., s. 390)といふこと、換言すれば、自我に於ては、吾人が實在的又は客觀的活動 (reelle oder objektive Tätigkeit) と名付け得るところのかの無限に進みゆく活動と共に、こを限定し客觀化するところの而かもそれ自身非限定的なる他の活動卽ち吾人が觀念的又は非客觀的活動 (idealle oder nichtobjektive Tätigkeit) と稱し得る所の活動が自我の中に原本的に結合せられてゐるといふことによりてのみ解決せられることが出來る。而してこの觀念的又は非客觀的活動はそれによりて同時にかの實在的又は客觀的活動の被限定の根據と而してこの被限定についての知識の根據とが與へられる如き種類の活動でなければならぬ。然るにこの觀念的活動は、原本

的には、それによりて自我としての自我の限定性を說明する爲めに、直觀する活動(anschauende Tätigkeit)としてかの實在的活動によりて立せられる故に、この實在的活動に對しては、直觀せらるゝことゝ限定せらるゝとは同一でなければならぬ、卽ちこの實在的活動は若しそれが自我の活動であらねばならぬならば、こは限定せられ同時に又限定せられしものとして直觀せられねばならぬ、これ直觀せらるゝとと限定せらるゝこと卽ち存在することゝのこの同一性の中に自我の本性は存するからである。かくてかの制限は、自我の無限に進みゆくところの活動卽ち實在的又は客觀的活動に對しては實在的であるに反し、これに相對立する非限定的なる活動卽ち觀念的又は非客觀活動に對しては觀念であるといふことが出來る(Ib., s. 385-6)。之を要するに實在的又は客觀的活動と觀念的又は非客觀的活動との原本的對立は自我に於ける制限の實在性と觀念性との制約であつてこの兩活動は自我に於て交互的に相豫想せられなければならぬ、卽ち直觀せらるゝところの可限定的なる實在的活動なくしては、直觀し限定する觀念的活動は無であると等しく、この觀念的活動に對してのみ、かの無限に努力するところの而かも自覺に關して限定せらるゝところの實在的活動は、それの限定性に於て無限的となり得るのである。而してこゝに自我の

限定性はそれの非限定性の制約であると共にそれの非限定性は又同時にそれの限定性の制約であるといふことの意味が存するのである。然しこゝに注意すべきは、この自我に於ける實在的又は客觀的活動と觀念的又は主觀的活動との原本的對立は、それがどこまでも同一自我に於ける對立である限りに於てそは決してそれの主觀(Subjekt)に關する對立ではなくして唯だそれの方向(Richtung)に關する對立でなければならぬ、卽ち『自我は無限的のものを生産せんとする傾向を有つ、而してこの方向は、外方へ向ひゆくもの(gehend nach äussen)又は遠心的(zentrifugal)として考へられねばならぬ、而かもそはそれ自からとしては、中心點としての自我の上へ內方へ歸りゆくところの活動〔卽ち求心的活動 zentripetale Tätigkeit〕なしには區別せられない。外方へ向ひゆく所の、而してそれの性質上無限的なる活動は自我に於ける客觀的であり而してかの自我へ歸りゆくところの活動は卽ち無限性に於て自己を直觀せんとする努力に外ならない。而して此の如き行爲によりて一般に自我の中に內的(das Innere)と外的(das Aeussere)とが分離する、而してこの分離と共に、かの自覺の必然性よりのみ說明せらるべき自我に於けるかの矛盾が立せられるのである』(Ib., s. 391-2)。

五　自覺としての自我は以上の如くそれが無限なる自己直觀的、自己限定的活動

である限りに於て、卽ちどこまでも自己を客觀化し對象に於て自己を觀ぜんとする無限なる活動である限りに於て、そは必然的に相對立する兩方向に向ひ行きこゝに限定的と被限定的、主觀的と客觀的、求心的と遠心的、觀念的と實在的との兩活動の對立として現はれ來るのであるが今この原本的對立は更らにより深きそれの根柢に於て反省せられ結合せられ客觀化せられねばならぬ、卽ちこの兩活動は自から同時に實在的にして且つ觀念的なる第三の活動の中に結合せられ統一せられねばならぬ、而してこの結合の結果として爰に一つの共同的(das Gemeinschaftliche)卽ち自己の活動に於て限定せられたる自我の狀態が生じ來るのである。而してこの兩活動の結合による自我の限定狀態としての共同的は、それが相對立せる無限的活動の所產物である故にこは必然的に有限的であり、而して相對立せる方向の結合である限りに於て靜止である、而かもなほこはどこ迄も或る實在的のもの(etwas Reelles)として考へられなければならぬ、これ綜合以前に單に觀念的に過ぎないとの對立は綜合によりて實在的とならねばならぬからである。これ故にこの共同的は決してかの兩活動の交互的否定として考ふべきではなくして、却つてこの兩活動がそれの上に交互的に自らを reduciren し而してこの兩活動の持續する競爭によつてそれの持續が制

約せられるところの平衡(Gleichgewicht)として考へらるべきである。從つてかの兩活動の平衡としての有限的なる靜止的なる而かも實在的なる共同的は、全く實在的非活動者(reelles Untätiges)又は非活動的實在者(unätiges Reelles)として特性付らるべきものでありそれ故にこはなほどこまでも單なる素材(blosser Stoff)として留まつてゐると言はなければならぬ(Ib., s. 399-400)。かくの如くにして自我に於ける相對立せる兩活動の結合としての共同的卽ち自我の限定狀態は、それが非活動的實在者である限りに於てなほ無意識的であつてこは未だ自我そのものに對するものとして客觀化せられてゐない。而かも自我はどこまでもそれの所產物に於て自己を直觀せんとする無限の活動である故にこの自我の限定狀態としての共同的はどこまでも自我に對するものとして客觀的となり意識的とならなければならぬ、卽ち『如何にして自我は自からを限定せられしものとして直觀するやうになるか』といふことが明らかにせられなければならぬ。今かの自我に於ける非限定的なる觀念的活動は『實在的活動に於て自から對象とならんとする自我の無限的傾向』であつた。然るに『自我は、この實在的活動をばどこまでも非觀念的活動となすところのそれに於ける消極的(das Negative)をば同時に etwas sich Fremdes として見出すこと

なしには、實在的活動をば自己と同一的として直觀することは出來ぬ。而してかの兩活動をば自我の活動となすところの積極的（das Negative）をば彼等は共通的に有するが然しかの消極的は唯だ實在的活動にのみ屬する。而て直觀する自我が客觀的に於てこの積極的を認識する限りに於て直觀するものと直觀せらるゝものとは一つであるに反し彼れが客觀的に於てかの消極的を見出す限りに於て見出すものは決して見出さるゝものと一つでない。卽ち見出すものは絕對的不可限定的又は非限定的であり、見出さるゝものは被限定的である』（Ib., s. 402-3）。然しながら今自我は凡ての定立の絕對的根據である。それ故に自我に對して或物が對立せられるといふことは、そこに自我によりて立せられない或物が立せられるといふことである。從つて直觀するものは、直觀せらるゝものに於て、直觀するものとしての自我によりて立せられない或物を見出さねばならぬ。然るに自我が、限定せられたるものをば自己自からによりて立せられないものとして見出すといふことは、やがて、自我は自我に對立するもの卽ち非我（Nicht=Ich）によりて立せられたるものとしてこの限定せられたるものを見出すといふことである。それ故に、自我はこの限定せられたものをば非我の感觸（Affektion eines Nicht=Ich）として直觀することなしには限定せら

れたものとして自からを直觀することは出來ぬ（Ib., s. 403）。即ち自我の限定狀態が自我に對して見出されたる或物又は外より立せられたる或物として、又は非我の感觸として立せらるゝ限りに於てのみ自我は限定せられたものとして自己を直觀するのである、而してこの非我の感觸の狀態はやがて所謂感覺（Empfindung）に外ならないのである。それ故に自我はこの感觸狀態に於ては、決して能動的でなくして受動的であり、純粹我でなくして感觸我である、即ち感覺とは『觀念的活動と實在的活動との兩活動の gestörtes Gleichgewicht』又は『限定に於ける自己直觀』（Selbstanschauung in der Begrenztheit）（Ib., s. 405）であり、從つてこの感覺はかの自我の原本的限定狀態のより高き客觀化展相化であると言はなければならぬ。

然しながら今自我が自のらの中に相對立するものとして或物を見出すところの感覺に於てかの見出さるゝもの（das Gefundene）又は感覺せらるゝもの（das Empfundene）は素より再び自我自から以外の何物でもない、即ち自我は或る對立者を見出すが、而かもこれをば自己自からの中に見出す。然るに自我に於ては活動以外何物も存在しない故に、自我に於ては活動の否定（Negation der Tätigkeit）以外の何物も對立せられることは出來ぬ。それ故に自我が自からの中に對立者を見出すといふことは、自我

は自己の中に止揚せられたる活動(aufgehobene Tätigkeit)を見出すといふことである即ち若し吾人にして感覺するならば吾人は決して對象を感覺しない、如何なる感覺も對象の概念を與へない、感覺は概念又は行爲とは絶對的に相反對せるものである、即ちこはどこまでも活動の否定に外ならない、而してこゝに感覺が一般に主觀的(subjektiv)と稱せらるゝところの根據が存するのである(Id., s. 405)

六　かくの如く自我はそれが原本的に制限せられしものとして自からを直觀する限りに於て感覺する。この直觀は素より一つの活動ではあるが然し自我は直觀すると同時に直觀者として自からを直觀することは出來ぬ。それ故に自我はこの行爲に於て何等の活動をも意識しない、從つて感覺作用に於ては、行爲の概念にあらずして唯だ感受(Leiden)の概念のみが考へられるのは當然である。然るに今自我はこの受動的なる感覺狀態そのものをも更らにその根柢に於て客觀化して直觀せんことを欲する、即ちこの感覺狀態をば、同一作用に於て、自我が同時に自からをばそれより區別するところの對象に變じなければならぬ。即ち『如何にして自我は自己自からをば感覺するものとして直觀するか』が明らかにせられなければならぬ。今自我は、自己自からをば感覺者として直觀する爲めには、又は自己自からに對して

感覺するものである爲めには、今迄單にかの實在的自我の中にあつたところの受動性をば觀念的自我自からの中に立しなければならぬ、卽ち自我は一般に活動的であるとなしには自己自からを感覺するものとして直觀することは出來ぬ、而して活動的なる自我は決して限定せられたものではなくして非限定的のもの、限界內に抑制せらるゝ活動ではなくして限界以上に逸脫する活動でなければならぬ、卽ちこは實在的自我でなくして觀念的自我でなければならぬ、從つてこの限界以上に逸脫するところの觀念的活動は自我が自からをば感覺者として直觀する爲めの必然的制約である。然しながらこれと同時に自我は、どこまでもこの限界以上に逸脫するところの觀念的活動をば限界內に抑制せらる實在的活動に相對立せしむることなしには觀念的として又は感覺するものとして自からを直觀することは出來ぬ、而かもこの兩活動の對立の直觀はこの兩活動が更らに第三の、限界內に抑制せらるゝと同時にこれを逸脫するところの卽ち同時に實在的にして且つ觀念的なる活動の中に結合せらるゝことによりてのみ可能である。それ故にこの第三の活動はやがて自我が自から感覺するものとして對象となるところの活動であり、而してこの活動によりてこゝに始めて感覺主觀と感覺對象との對立があらはれ、自我は唯だに感覺するも

のであるのみならず自己自からに對して感覺するもの又は感覺するものとして自己自からを直觀するものとなるのである。このよつて以て自我がそれの狀態をば對象にまで高むるところの第三の活動はやがて狹義に於ける直觀(Anschauung)に外ならない。而してこの狹義の直觀に於て對象は直接的に現在的であり從つてそこには何等直觀せられるところの外的作用もなく又は直觀より獨立せる對象の存在を指示するやうな外的作用もない。それ故に直觀の直接的對象は全く直觀自からの所產物である、從つてこの狹義の直觀はやがてこれをば生產的直觀(produktive Anschauung)として規定することが出來るのである。而してこの生產的直觀は、それが感覺作用の直觀作用(Anschauen des Empfindens)である限りに於て直觀作用の直觀作用(Anschauen des Anschauens)であり從つてかの感覺が第一展相に於ける直觀作用(Anschauen in der ersten Potenz)であるに對してこの生產的直觀は、第二展相に於ける直觀作用(Anschauen in der zweiten Potenz)であるといふことが出來る(Jb. s, 427)。之を要するに自覺の第一作用に於ては、自我は一般に直觀せられる、而してこの直觀せられることによりて限定せられる、從つてそれの結果は自我の限定狀態である。次に第二作用に於ては自我は一般にではなく特定的に限定せられしものとして直觀せられる、

即ち非我の感觸として限定せられる、而してその結果は自我の感覺狀態として現はれる、而してこの感覺狀態は、それに於ける限定する活動と限定せらるゝ活動、即ち觀念的活動と實在的活動とが更らに自覺の第三の活動即ち同時に觀念的にして且つ實在的なる活動に於て結合せられ、こゝに感觸と活動との交互的規定が必然的となることによりて自我はそれ自から感覺するものとして對象となる而してその結果は生産的直觀として現はれる。即ち自我に於ける限定の第一作用は全然無意識的に起りて、かの『原本的且つ最初の限定性』を立し、第二作用に於て、この原本的作用はこゝに感覺として zustündlich ではあるが、然し未だ gegenstündlich ではない、而してかの第三の生産的直觀に於て、感覺作用そのものが直觀せられ、こゝに直觀は始めて、對象的となり感覺主觀と感覺對象とが分化しかの理論的自我の主要契機をなすところの物（Din ge）の表象が始めて成立するのである。シェリングがこの生産的直觀をば『より高き展相に於ける自我』又は『叡智にまで高められたる自我』（Ib., s. 532）と稱したのはこれが爲めでなければならぬ。（未完）